

忘れ得ぬ人々

生駒千里

・ユーモアをこよなく愛した映画監督の実像は、脚本家として彼に付き合った藤本義一氏の「生きいきの記」という小説で如実に描かれている。

若い頃読んだ本の中で感銘を受けた数多い随筆があるが未だに心に残っているものに、辰野隆さんの「忘れ得ぬ人々」という本がある。

された方だが、近年、欧米での評価が非常に高く、国内でも全集ともいえる「小津安二郎作品集」などが刊行され、静かなブームになっているようだ。

辰野さんは当時仏文学界の泰斗で、門人には小林秀雄氏を始め、多数の文学者が輩出した。その題名を借用して、私も、私の映画生活における「忘れ得ぬ人々」を書いて見たいと思う。「忘れ得ぬ人々」という以上に、私の映画界に入ってから恩師とも師匠とも思った二人の人物である。

小津安二郎、川島雄三のお二人である。

共に最早や幽明界を異にする故人であるが、私の映画青年時代に、強烈な影響を与えて下さった監督である。

小津安二郎は、全く日本的ドラマを完成

一方、好事家の間では評判は高いが、その異風な作品の為、現在では忘れ去られたかと思っていた川島雄三作品が、目黒と板橋の区役所の映画同好会の人達の熱意で、昨年「川島雄三作品を見る会」が、五日間に亘って、開催され、彼のかつての友人達や私を初め弟子達は、嬉しくもあり、戸惑った事も正直、感じたものだ。

川島雄三監督には、助監督として六、七本も付いていたので、公私にわたって、川島雄三の人間像に接する事が出来たと思っている。この異常な感覚を持ち、ブラックユーモアをこよなく愛した映画監督の実像は、脚本家として彼に付き合った藤本義一氏の「生きいきの記」という小説で如実に描かれている。

小津監督の作品には一本も助監督として付いた事がなく、只、仕事場での先生を脇から垣間見ただけだ。然し、何が気に入られたのか、蓼科の山荘に、ちよくちよくお呼びが掛り、泊り掛けでお邪魔したものだ。小津先生は、シナリオライターの野田高梧さんと共同創作なさるので、その仕事場は蓼科の山荘に籠もるのが通例だった。シナリオが完成すると、その完成祝いがあったり、顔見知りの土地の人々や、小津組の院外団と、自称していた私達助監督達数人が呼ばれる。不思議と現場のスタッフで参加するのはプロデューサーだけだった。

完成祝いには映画が出来上った訳でもないのに、それは盛大で大宴会となるのが毎度の事だった。そして宴酣となると、一番先に余興を出すのが小津先生であり、相手は又野田さんでもあるのだった。そして、私達も狩り出されて、下手な隠し芸をしたものだった。

ある時小津先生は、ふと私にこう語った。「スタッフ達と一緒に酒を飲む宴会の時は、監督が一番先に馬鹿な真似をしなきゃいけない。そうしないと、下の連中は気楽な気分が酒が飲めないもんだ」と。

又、ある時は、私がもう新人監督として二、三本撮り出した頃だが、やはり酒席で何気なく、私に教えて下さった。丁度私が子供が主役の映画を撮影しようとしている時だった。

「子供と話す時は、しゃがんで子供の視線と同じ位置に自分を置いて、芝居の話をするんだ。立ったまま、頭の上からどんな注文を出したって、子供は怖がって、堅くなるばかりだから」

小津作品の製作現場では教えていただけるとは、監督としての心構えとか、演技者への接し方とか、さりげなく教えていただいた。

又、よく、映画監督は、素晴らしい絵画を見た時、良い音楽を聞く事は勿論の事で、酒も高級な美酒も飲んで見なければいけないし、美味しい御料理、絶世の美女とか、すべて本物に接するチャンス逃がさないよ

うにしなければ駄目だぞ。」と言われながら、私に信州産の二級酒の地酒を注いで下さった。

この正反対な人物と言えるのが、川島雄三監督であった。小津先生の酒は滅多に乱れる事なく、ユーモアを漂わせる大人の風格があったが、川島監督の酒は壯絶なものであった。

飲み出すとへべれけになる迄止まらないう。京都制作の作品で助監督として東京から一人連れて行かれ、同じ旅館で三ヶ月、毎日朝から晩まで一緒だった事があった。仕事が終わると毎晩の様酒が始まり、終りは、私が川島監督を背中に背負って酒場から旅館に帰り、寝かしつけるのが習慣のようになってしまった。

翌朝はきまつて二日酔となるのは当然だが川島さんは大の葉マニアで、朝食前に十数種類近い葉を、あれこれと思案しながら飲むのが趣味の不思議な人だった。これには私も強く影響を受け、私も目下趣味服葉の傾向を持つに至ってしまった。

仕事の面では随分思い切った、監督の領分に関わる演出上の部分をまかせてくれた

り、打ち合せの段階から、必ず私を同席させ、映画監督の仕事が無言の中に教えてくれる、ある意味では大胆な人だった。その分、酒を飲むと、これ又すごいカラミ酒で、コテンパンに批判される事も多かったが、今考えるとこの昼間と夜の落差の大きい、硬軟合せた接し方が、私を教育していたのだと、後になって、わかって来た。

川島さんはその代表作「幕末太陽伝」のような、シリアスな面と、この原作である落語の「居残り佐平次」や「お見立て」のようなブラック・ユーモアの世界が一作家の中に両棲していたのだと思われる。

この様な二人の対照的な作家に目を掛けて頂き、私の映画青年時代は、ラグビーのボールの様に不規則きわまりないバウンドをしなから過ぎて行ったが、この希有な二人の人物に生前、私は私なりに全身でぶつかって行った自分は非常に幸せだと思っている。

私の映画界における「忘れ得ぬ人々」はこの二人の映画作家以外に考えられない。